E 2　結婚成立過程について――母子関係――

鳥取女子短大　高橋惇子

目的　近年、家族をめぐる青少年、婦人、老人等の問題が重大視されている。問題の背景は、わが国の急速な経済成長にともなうさまざまな様相が複雑にかかわり、われわれの生活に緊張をもたらしていると思われる。問題の背景は簡単ではないが、家族形成にあたって母子間のズレを分析し、家族関係学習に生かすことを目的とする。

方法　調査時期、昭和58年6月20日～7月10日、調査対象、鳥取女子短期大学学生とその母親。方法、質問紙は母親、娘の二種類作成。母親用調査票を学生にもち帰らせ、さきとり調査をさせ回収。学生用は調査時を7日～10日ズラして、集合調査。

結果　①結婚に求めるものは、娘は「精神安定・社会的信用」（41.1％）に、母は「女の幸福」（43.7％）に高い。②結婚相手に対する重視項目は、母子とも同傾向であるが、娘は愛情、収入、容姿、趣味にやや高く、母は健康、将来性、職業にやや高く両者間に差がある。③結婚年齢は、母は23～24歳に集中し、娘は23～24を中心としながら21～22歳（26.2％）、25～26歳（16.8％）と選択の幅が広い。④結婚形態は、母は見合の肯定者（64％）が多く、娘は逆に恋愛（67％）を肯定するものが高い。⑤結婚相手の地理的条件は、娘は県内（43％）が、母は市町村内（46％）が多い。⑥相手の職業は、サラリーマンを、娘（73.7％）、母（83.2％）とも望んでいる。⑦相手選択の意志決定は、当事者を主とするものは、娘（89％）が母（60％）より高い。⑧性別役割については、分業を肯定するものは、娘（51％）が母（36％）より高い。⑨親との同居を望むものは母子とも10％前後で、娘は別居（36％）を、母は条件が整えば同居（35％）とするものが目立つ。